



本林 友梨 新連載

皆様、はじめまして。2016年に立命館大学応用人間科学研究科を修了し、現在は地方総合病院で心理士をしています。心理士になりたくなった理由は今でもあまりよく分かっておらず(きっかけはたくさんあるけれど、これといったきっかけはない)、大学院に入って初めての臨床心理学の授業で、「大変なところにきてしまった」「自分に合っていないぞ!」と蕁麻疹が出たことを覚えています。そんな私も2年間の心理士教育で、それなりに心理士脳になり、臨床心理学のことを考えても蕁麻疹が出なくなりました(教育ってスゴイ)!

そんな私が、今、悩んでいることがあります(というか社会に出てからずっとですが)。それは臨床実践で、大学院で習った“そのまま”を使えない場面が多いことです。例えば、心理面接は個室で行うことが当たり前と習ってきましたが、現場のいろいろな事情で個室の確保が困難だったりします(個室の確保の仕方教えてほしかった…!)。そんな中でもいろいろ工夫しながら臨床を行っているのですが、行えば行うほど習ってきたことと実際との間に“ズレ”を感じます。蕁麻疹は出なくなりましたが、劣等感は募るばかりです。

社会に出てそろそろ10年になりますが、いよいよその“ズレ”に対してしんどさが爆発しそうになってきました。今後も心理士

を続けていくために、この“ズレ”に向き合っていかなければいけないと思い、執筆を決意しました。執筆を通じ、自分の問題意識に対し関心を高め、学んでいけたらと考えています。

心理臨床における多重関係を考える P246~

高名 祐美

2024年も残り僅かとなった。この1年を振り返る。なんといっても元旦に起きた能登半島地震。まさかの出来事だった。自宅は準半壊、ブロック塀が壊れ地面が割れた家の前。断水が続き、トイレ・炊事・洗濯・お風呂に手間と時間を費やす。毎日が不便の連続だった。10ヶ月たった今、屋外の修復はなんとか終えたが、家の中は様々な箇所が未修理のまま。そして土蔵がくずれかかっている。それでも日々の暮らしを家でできていることに感謝する。

私の住む七尾市ではようやく解体が進んできた。あちらこちらで家屋が解体され更地になり、街の景観が大きく変わっている。そんな町並みを眺めながら、2025年はどんな年になるのだろうかと思う。あの日を思い出して「まさか」が再び起きるのではないかと心がざわつく。来年のお正月が、無事に家族とともに過ごせることを心から願う。

父が自分の身を呈して 教えてくれたことⅢ P217~

水野 スウ

なぜかこのひと月間、千客万来。県別で数えると、大阪から4人、東京から4人、千葉から2人、愛知から4人、埼玉から3人、瀬戸内海の伯方島から、一番遠くはイギリスから、and more。この中には、能登に行く前に、行った後に、寄ってくれた人たちもいれば、「紅茶の時間」恒例の宮沢賢治さん紅茶や、クッキングハウスの松浦幸子さんのSSTワークショップに参加するため、はるばるわが家に来てくれた人たちもいます。

松浦さんとのSSTは石川で17年目になりました。今回のマガジン原稿はその時の気づきや新しく学んだことのミニレポートです。PTSDからPTG(心的外傷後成長)へ—Gはgrowth、心に受けた傷や悲し

みをいっぱい悲しんで、それを受け入れ、認めた時に次の希望がみえてくる、というPTGがテーマの一つでもあった今年のワークショップ。そのことを人に説明できるほどはまだ理解できてないのだけど、今の段階で感じて言葉にできたことを綴っています。

つい先日、金沢で一週間だけ上映された「私は憎まない」という映画を見てきました。ガザの難民キャンプで生まれ、医師になってイスラエルの病院にガザから通い、イスラエル人の赤ちゃんもパレスチナ人の赤ちゃんも同じようにとりあげる産婦人科医、イゼルディン・アブエライシュさん。彼の仕事分野である医療を用いて、イスラエルとパレスチナの分断の架け橋になりたいと強く願っている医師の、ドキュメンタリーです。

そう願う彼の愛する3人の娘が、2009年、イスラエル軍の砲撃によって、彼の目の前で犠牲になりました。たえ難いほどの悲痛、苦しみを想像します。「それでも、私は憎まない」とアブエライシュさんは言うのです。どうしてそんなふうに見えるのだろうか、思えるのだろうか。彼の魂の在りどころを知りたくて、彼の言葉をタイトルにした『それでも、私は憎まない I shall not hate』(亜紀書房)を映画館で購入。いま読んでいるところです。

きみちは言葉をさがしている P68~

馬渡 徳子

もう師走なのか…。孫から、「ぼちぼちクリスマスツリーを飾ろうよ。」と急かされ、ふと気が付いた。

例年は、ハロウィンが終わるや、わくわくしながら「今年はどんながに飾るかね」と連れ合いと孫と相談しながら出窓を飾ってきた。



「犬の散歩のときに、季節ごとの出窓の

デコレーションに足を止めて癒されています。」「クリスマスツリーは町内の灯台のようで気持ちが温かくなります。」と町内行事の折に感想をいただくこともあり、励みにしてきた。

今年は、孫に声をかけられるまで、心が動かなかった。「うんうん。そうやね。明日の明日の明日にするかね。」

そうした次の週、私の心もちを察したのか、孫がモールツリーをつくって持ってきてくれたことで、腰が上がった。早速玄関に飾った。

そうだった。私の好きな言葉は「継続は力なり」だったっけ。

11月16、17日に、水野スウさんと17年前から共同開催を継続してきた「松浦幸子さんと学ぶ SST」には、両会場に二次避難をされておられる方や、実家やきょうだいが被災をされた方も来られた。

地震と豪雨で一年に二回も激震災害指定となった珠洲市での開催歴もあり、当時ホストを務めてくださった元医療ソーシャルワーカーさんも参加された。

珠洲市には住民運動で原発誘致を阻止した歴史がある。2007年の地震、2019年から続いた群発地震、元旦の地震、豪雨災害により、更なる多様な甚大な被害が生じていたことだろうと想像すると、先達の方々のご選択に頭を垂れるばかりである。(2024年3月15日配信の対人援助学マガジン第56号水野スウさんの本文をご参照ください)

ふりかえりの時間に、講師の松浦幸子さんから、ご紹介いただいた著書がある。精神科医 蟻塚亮二氏の『悲しむことは生きること-原発事故とPTSD-』風媒社。

早速一気に読了し、何でも読み返している。人のもつ力の深さに感服するとともに、私たち世代が未来に何を選択し何をつなぐのか、真剣に問われていると心に刻んだ。

晩年認知症と悪性腫瘍とともに生きた亡き父が、自由なお外廻りの時に足を止めて花を添えていた「お寺の掲示板」を思い出した。

きっかけは、2011年3月のマギー司郎氏の『生きてるだけで、だいたいオッケー』という掲示板。

「天国のお父さん、激動の一年がもうすぐ暮れるよ。石川県民が、全国の皆さん

が、安全に過ごせますように。心穏やかに過ごせますように。合掌」

馬渡の眼 P137~

乾 京子

ダブルラッキーセブン(77歳)になってから、少々体のあちこち故障を起こすことも増えました。ちょっと疲れているなあと思いつつ、遠出の運転、長い石段の上がり降り、主催する行事の準備に本を運ぶ…そんなことが重なっていたら、ある日、朝方トイレに起きようとするのに立ち上がれない。右足に体重をかけると激痛！さすがの医者嫌いの私も整形外科に行ってみれば、「ああ、軟骨が減ってきていますね。いわゆる膝関節炎の状態ですね。お水抜きますか？痛いし、完全に抜けるわけではないですが・・・」「長いこと使っているんだから仕方ないですね。まあ、あんまり無理をしないことと周りの筋肉を鍛えることですなあ。」やれやれ、老いてきている自分を自覚すると体が言っているようです。こんな日々ですが、これからの季節、琵琶湖の周りではしばしば虹が出ます。今週、琵琶湖の上に大きな弧を描く虹に出会いました。その翌日は、半分の虹。いくつになっても虹を見るとうれしいものです。きっと、いいこともあるのでしょう。

じゃりんこ文庫 P244~

宮井 研治

台湾へ行ってきた。

縁あって、息子が台湾の娘さんと結婚することになり、奥さんとともに式に出席するためである。台湾は2度目であるが、前回は台北、今回は台南。息子から台北と台南では、人の気質や街並み、食べ物(良いほうに)が随意分違うと聞いていたが、おおよそ聞いた通りであった。ノスタルジックな雰囲気、昔の日本を想像させるような、こうしたガイドブック的説明はまさにその通りであった。人が優しいというか、おせっかいというか。街中で何かたずねても、嫌な顔をされることは1度もなかったといっている。ただ、英語の片言でさえ(こちらも英語が怪しいのでさらに)通じないことがあった。あるレストランで、注文に困っていた時にたまたま隣の席の中年男性が通訳を買

って出てきてくれた。「わたし、にほんご、すこし、しゃべります。」のノリである。たしかに、その店のご主人は、何を聞いても顔を赤らめる(暗かったので、たぶんではあるが)ばかりだったが、その人の通訳もいまいちわからなかった(でも、感謝しています)。取り皿がほしかったのだが、もう一皿、サラダが出てきた。おなかいっぱいだったが、台日友好のために詰め込んだ。こんな素朴な温かい国がずっと平和でいてほしいと、切に願った。



どこか、そこでお祭りあり。爆竹が鳴っていた。



手書き看板が有名な映画館。たしかに写実的ではない(似てない)



滞在したホテルのちょうど道をはさんで正面にあった林百貨店。たしかに映えます。

人生は対応のヴァリエーション P239~

山岸 若菜

9月になっても10月になっても暑かったのに、11月も終わりになって突然寒くなりました。この時期みんながかかる病は『急性何着たらええかわからん病』です。ところが特に女性は年を重ねると『慢性何着たらええかわからん病』にもかかることを知りました。40歳を超えるとそれまで着ていたカジュアルテイストの服が似合わなく

なるんです。あれ何なん？

ずっとカジュアルで生きていたから、何を着ればいいのかほとんどにわかりません。幸い私は転職してちょっとそれまでよりお堅めの服を着ないといけなくなったので、周りの先輩方をキョロキョロ見回して勉強しています。『慢性何着たらええかわからん病』に季節的な急性症状も合わせ、何をどうしていいかわかりませんが、これまたありがたいことに年を重ねると『その辺にあるものでなんとなくやり過ごす術』が身につけてるんですね。

なんだかんだバランスよくなるようにできてるんだなあと思う今日この頃です。

ある訪問看護師のあたまの中
P236~

内田 一樹

忙しすぎて目の前の日々をやり過ごしながら、気づいたら1年が終わろうとしています。今年は石巻市へのスタディツアー、水俣病についてオンライン講演会、ふくしまへのスタディツアーと本当の意味で「東北」「復興」についての講座になってきている1年でした。一方で対人援助学を学ぶ前段階としての高校での学びをどのようにつくるのかについてはまだ霧の中でした。

社会科の授業を対人援助学の視点から
P231~

櫻井 育子

「風の時代」がいよいよ本格的になった、と言われている。どうやら「水瓶座の時代」らしい。生まれたこと自体、あまりにもそこには「わたしの意思」などは到底入る隙間もないところから「わたし」が始まっている。だから、もう「わたし」というものを思い通りに動かそう、などという考え自体がナンセンスなのではないか、とすら思う。複雑になることが発達だとしたら、なおのこと、いろいろなことが「ありがたい」のだ。

わたしは「水瓶座」なのだが、ここ数年で出会った書家、水彩画家、陶芸家、の素敵な方々がなんと全員、「水瓶座」だったということから、その名も「水がめ座4人展」というグループ展をする運びになった。いろんなものに乗っていこうと思う。(期日: 2025.1.21~1/26)

場所: SARP アーティストランプレイス

宮城県仙台市青葉区錦町 1-12-7)

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる

P226~

鳴海 明敏

今年の青森の秋は、これまでに経験したことのないような秋です。例年だと、10月の中旬頃から曇りの日が続く、雨がいつのまにかみぞれに変わり、車のタイヤを冬用に履き替えるタイミングを見計らっているうちに、朝起きてみると路面が真っ白で慌てる、ということを繰り返しながら、いつの間にか本格的な冬になっているという感じなのですが、今年は、連日お日様が顔を出していて、気温もそれほど下がっていません。陸奥湾を震源とする地震や十和田湖周辺の火山活動など、不安材料もありますが、銀杏や落葉松、満天星躑躅の紅葉を長い間楽しめました。

9月の末に、軽い脳梗塞を患って、10月の初めに2週間ばかり入院しました。現在は、退院して職場復帰しているのですが、車の運転についてドクターストップがかかっていて、その解除手続きが遅れていて、不便で仕方ありません。

私には全く自覚がないのですが、主治医からは、こんなに軽くすんだのは、運が良かったとしか言いようがない。あのまま死んでいてもおかしくないし、多くの場合は寝たきりになっていたんだよ、と言われました。

このような幸運に恵まれたのは、現在の仕事をさらに頑張れという、何ものかの意志だろうとも思ったのですが、しばらくして、落ち着いてきたら、この幸運は、今の仕事を滞りなく次の代に引き継ぎなさいということと与えられた時間の猶予なのかなあと思うようになってきました。

児童心理治療施設の園長室から
~こかげのにちじょう~

P224~

畑中 美德

夏の初めに外国のお土産でいただいたアロマのろうそく。今年は暑さが長く続いたと思ったらいきなり「冬」になり、初めてスト

ーブを焚いた日の夕方、「そうだ。ろうそくも」と思い点けてみた。夏にも点けないことはないけれど、陽が落ちるのが早い時期のろうそくにはほっこりする。淡いグリーンガラスの器に入った香りのよいろうそく。ろうそくを「育てる」とも言うらしい。これから点ける日も多くなるだろう。どのように育てていくか、楽しみである。

一語一絵
P219~

山下 桂永子

先日、友人と栃木県に旅行に行きました。目的は那須どうぶつ王国という動物園にいるマヌルネコに会いに行くことでした。4年前にコロナ禍で家でゴロゴロしながら毎日のように見ていた「マヌルネコのうた」という動画でマヌルネコという存在を知ってからすっかりファンになってしまい、いつか会いに行こうと思ってやっと念願が叶った旅でした。マヌルネコ以外にもたくさんの動物と近距離でふれあい、那須はおいしいものもたくさんあり、とても楽しい旅でした。そういえば、今年は夏に北海道の旭山動物園にも行きて、最近旅の目的が動物園になりつつあります。子どものころは特に動物にも動物園にも興味がなかったのにこの年になって動物園が楽しめるなんて思ってもみなかったの、自分の変化に驚きつつ面白がっている今日このごろです。今回の話とはあまり関係がないのですが、読んで頂ければ幸いです。



会いに行ったマヌルネコのボルくんです
心理コーディネーターになるために
P139~

渡辺 修宏

「日課にしていた(簡単な)筋トレをやらなくなった。なんだか手首が痛かったからである。少し休めば痛みがひくと思いきや、一ヶ月たってもどうも今ひとつ...そうこうし

ているうちにトレーニング再開のタイミングを逃し、はっと気づくと体重増。恐ろしや……」

**対人援助実践をレポートする
この一冊
P222~**

米津 達也

やっちゃった…。原稿提出締切りの話だけではない。本文で書いた通り、引越越し作業の定番、ぎっくり腰である。ここ数年は、半年に1回ぐらいはある。元来、姿勢も良くない。腰痛が出ると、そこを庇うように肩や背中に負担が掛かる。結果、全身がガチガチに凝ってしまっただけでどうにもならない。エコロジカルとシステムの話、溜息をつきながら我が身を思う。

**川下の風景
P212~**

玉村 文

今年もあと1ヶ月。年末年始には、新居への引越しという大イベントが控えています。乳幼児3人を連れての引越し…一体どうなるのか？何に気をつけたいのか？と不安でいっぱい。そんな時、「AIにも聞いてみよう」と思いつきました。

AIはこれまでのやりとりを覚えていて、「5歳、3歳、0歳の子どもがいるわたし」に合わせた最善のアドバイスを提示してくれます。気づけば、問題解決の選択肢の一つとして、さらには最初に相談する相手としてAIが頼れる存在に。そんな2024年11月、育休期間中の生活を過ごしています。(この文章もAIに修正してもらいました)

**応援 母ちゃん!
P203~**

川畑 隆

やっぱり止(や)められませんでした。新連載です。タイトルは、映画『私の頭の中のケシゴム』のモジリですが、最近はこのしきのことでも自分の中で点検の目が光ってしまいます。モジリはいいとしても、ケシゴムを否定していないかという懸念です。否定しているのですが、何というかその一、ケシゴムが表しているものを否定すること

になっていないかですね…。でも「まだ」が自分で気に入っていることもあって、そして自肅がイヤなこともあって、まあいいかと始めることにします。

原稿の最後に「宣伝」として載せましたが、前連載のファイナルで予告したとおり、YOUTUBEに『ターチャンのオリジナルソング』の投稿を始めました。

若い頃に作った曲を若いターチャンすなわち私が歌っていて、①②を投稿済、⑥⑦くらいまで続けるつもりです。チャンネル名は「京都のターチャン」です。よかったら覗いてみてください。

動画を自分で撮ってそれに曲をのせ、字幕で歌詞を付けました。この編集作業を初心者の私に簡単にこなさせてくれたのは、「CAPCUT」というフリーソフトです。実にシンプルでビックリするぐらいよいものに仕上がりました。

ターチャン、なかなかやるじゃないと思わせてくれました。

**私のあたまの中のケシゴム
P198~**

杉江 太郎



児童の福祉分野で働く杉江です。この前、家の前に「おむすび」が落ちていました。おにぎりと呼ぶのではなく、「おむすび」と言うのには理由があり、まんまるで、海苔などにも巻かれておらず、形を取っても大きさを取ってもまさに「おむすび」だからです。とはいえ、なぜおむすびが落ちていたのでしょうか。どこかに穴があって、その下ではネズミが歌っていたかもしれません。(葛籠もらえるかな?)それとも遅刻しそうな高校生が、おむすびを口にしながらぶつかってしまい、そのときに落としてしまったのでしょうか。(良く口に入っているのは食パン)誰かが毒入りのおむすびを…?その場合は警察に連絡するのでしょうか。相手にしてもらえるのか。そもそも何か具は入っていたのでしょうか…?入れるなら梅干し?昆布?おかか?…

なんてことを考えていましたが、結局謎に包まれたまま、カラスの餌になってしまい、カラスにも異常は見られなかったため、毒入りではなかったことだけがわかりました。世の中には、不思議なことがあるものです。真実が何かあるにしても、そのことを知る術はなく、想像するしか出来ません。そんな日常のちょっとした疑問を見つけては、いろいろと想像しながら一人で楽しんでいきます。

**「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P193~**

浅田 英輔

いつも「短信なに書こうかなー」と思って前回の皆様のものを参考にしたりするのだが、見事に「暑い」が並んでいた。青森はずっかり冬である。里に初雪も降り、冬タイヤに履き替えた。クルマ好きとしては、スタッドレスタイヤは柔らかくて気に食わない。履き替えるたびに「早く夏タイヤにしたいなあ」と思うのである。

**臨床のきれはし
P83~**

三浦 恵子

先の執筆者短信で紹介されていた「システム・クラッシャー」、映画館での視聴はかないませんでした。11月にブルーレイが発売されることを知り、早速予約をしました。

今年は東日本大震災関連の映画を勉強会や単館系映画館で震災関連の映像に接する機会が多くありました(「生きる」「生きて、生きて、生きろ」など)。特に「生きる」では、身近に大川小学校出身の方がおられたこと、私自身も東日本大震災で親族が被災し、震災直後は被災地となった地域での円滑な業務執行のため他省庁と連携を続け、その翌年には実際に東北に赴任して復興支援に関わったこともあり、視聴後様々な思いが押し寄せて席が立てないぐらいでした。ですから今年の鑑賞した映画はかなりヘビーなものが多かったのですが、「システム・クラッシャー」は、ドイツと日本というまさに「システム」の違いを超え、対人援助場面でありうる共通点が多々盛り込まれ、打ちのめされる思いがしました。

日本でも、たとえば様々な課題を抱えて困

っている保護者を「モンスターペアレント」「モンペ」と称し、その名称の枠組みの中にカテゴライズしてきた歴史があります。確かに相手方保護者に明らかな非がある場合もあるでしょうが、相手を「モンスター」と呼称した時点で、対話可能な人間同士という視点が外れてしまうのではないかと、この危惧を感じました。

そしてこの「システム・クラッシャー」という言葉が、ドイツで実際に次々と不応を起こして支援機関や支援者を疲弊させる子どもを示す隠語として使われていることに、衝撃を受けました。

ネタバレを避けるために詳細は省きますが、一度は主人公を自宅に引き受けると述べ主人公である少女をこれ以上ないぐらい歓喜させた実母が、途中で引受けを断念し、そのままケア会議から抜け出していく際「最後のお別れぐらい自分でいいなさい」とソーシャルワーカーが呼びかける場面、支援者との境界線を主人公である少女に踏み越えられた結果、主人公から「自分のパパになってほしい」「あなたの家族を殺したら私の家族になってくれる」という内容の言葉でもって迫られると当該支援者・・・ラストシーンはまさに我々観客に問いを投げかけるような形で終わり、そうした点ではベルギーのダルデンヌ兄弟の作風に似ていると感じました。

執筆者短信は発刊されるとすぐに拝見するものですが、本当に良い映画に出会うことができました。「あ～、映画ってすばらしいですね～」(このネタを知らない世代の方も多いかもしれない・・・)などの「万人受けする」地上波放送枠では決して放送されない映画だと思いますが、多くの方に見ていただきたいと思いました。松村様ありがとうございました。

更生保護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という

観点から考える

P178～

迫 共

衆議院選挙では自公政権が過半数を割り込み、某野党が脚光を浴びるとタイミングよく醜聞が吹聴されたり、米国ではトランプ氏が大統領に再選され、上下両院が共和党によって独占されたり、兵庫県

知事選挙ではパワハラとおねだりで不信任となった知事が再選したと思ったら、あっという間に選挙手法の違法性が話題になったり…世の裏側の都合悪いところが捲られる 2024 年後半でした。

勤務校では今年、入試委員を仰せつかったのですが、9・10 月に学科独自でやる謎の入試があり、それで定員の半分くらいを埋めています。試験会場の設営も問題用紙の印刷も全部学科教員だけでやり、事務方はエントリーの受付と結果送付くらいしかしません。他の入試業務でも、問題用紙や解答用紙の仕分け作業が入試委員の仕事だったりします。この謎も捲られる日がくるのだろうか…。

追メアド：sakotomoya@gmail.com

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

P189～

黒田 長宏

推しの清宮幸太郎選手(日本ハムファイターズ)が、今年前半は選手生命の危機かと思っていたら、後半に変身して、訳ありだが全日本に選ばれてしまい、寒くなってもまだ野球をやることになってしまった。人生はたった 1 年でもわからないものだ。そういう私なんか今年は 1 月 23 日に急性心筋梗塞で死ぬかと思ったのに。まだこうして書かせていただいている。

<https://konnankyuuotai.jimdofree.com/>

あお結婚

P159～

松村 奈奈子

今年の秋の旅は、富山県南砺市井波町に。日本一の木彫の町で、約 200 人の木彫の職人さんがいるそうです。古い街並みには、仏像や獅子頭、欄間などを彫る様々な職人さんの工房が並んでいます。ガラス戸を通した自然光で彫るので、職人さんの工房はみな道に面しており、彫っている姿を覗き見る事ができます。途中で彫刻刀屋さんがあったりと、町全体が木彫一色で面白い。さっそく、職人さんの工房で木のスプーンを彫る体験に参加して、3時間硬い桜の木と格闘しました。途中職人さんとのティータイムもあって、この町を気に入って若い人が移住して、カフェや古

着屋をしたり、私たちと同じよう木彫体験をする外国人もたくさん来るという話を聞きました。小さな町でしたが、とっても魅力的でした。

精神科医の思うこと

P125～

村本 邦子

9 月から年末まで休む間もなく走り続けている。還暦過ぎてからは、もっと余裕のある働き方をしようと努力して、(コロナもあつたりして)それなりにうまくやっていたような気がするが、まったく若い時のような動き方になってしまった。いろいろなことがつながって楽しくてしょうがなくて、いつの間にかつい何でもホイホイ引き受けてしまって、息をつく暇もない。来年は気をつけよう。

そうそう、10 月に、この 2 年間インタビューして回っていた婦人相談員の本『婦人相談員物語—その証言から女たちの歴史 (herstory) を紡ぐ』(村本邦子・松本周子著、国書刊行会)が出来上がった。是非多くの方に読んで欲しい。



周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P100～

國友 万裕

今年の夏休み、初めてボランティアガイドをしました。ガイドした人はアジア系カナダ人のご家族でした。ご夫婦は 40 代。中学生くらいの娘が 2 人の 4 人家族でした。お父さんのお仕事は外科医なのだそうで、イ

ンテリの品の良いご家族でした。マップも使いこなせる人たちなので、僕がいなくても、アプリとマップで京都見物くらいはできそうな人でした。

伏見稲荷、清水寺に行ったあと、お屋は近くの豚カツ屋で食事。その後午後は金閣寺へ行きました。

トンカツ屋のあと坂のところで、僕は転けてしまいました。すると娘さんたちが心配してくれました。それからスマホの電池がなくなってきたことをもらすと充電器も貸してくれました。そして、終わったあと、お母さんがメイプルシロップのお土産をくれました。



一般に欧米の人は優しさをストレートに表現してくれます。日本人は下手なんですよね。日本人は表向きは親切に見えても裏で何か言ってそうに見える。

僕は子供の頃から陰口を言われまくった人生だったので、どうしてもそういう偏見が抜けません。女性に関しても、今は親切でも、ある日突然態度を豹変させて意地悪をされるのではないかという恐怖が常にあるのです。

昔から、女の子が子供の頃に男に性的いたずらをされたりしたら、そのトラウマで一生男と付き合いなくなるのではないかと心配する人はたくさんいました。僕はその逆パターン。たくさんの女性に踏みつけにされた人生だったから、女性を素直な目で見れなくなっている。

だけど、そんな男に心配したり、同情したりしてくれる人なんているでしょうか？男性差別はそこのことです。被害男性は被害女性に比べれば少ないのかもしれないけれど、マイノリティであればあるほどトラウマは深刻です。

皆さん、それをわかってください。世の中はまだまだ男社会であるにしても、女性に酷いトラウマを負わされた男は確実に存在するんです。

スポーツおじいさんになりたい！
P75~

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育者養成をしています。それから、いくつかの養成校・養成施設で、社会福祉士の養成にも携わらせていただいています。

私は近年、寝る事が大好きになってきました。ちょっと前までは寝るのがもったいない、と考え、夜更かしが大好きだったのですが、ようやく「ちゃんと6時間寝ると、心身の調子が整う」ことを実感するようになりました。寝るっていいですよ。って何を当たり前のことを言ってるんでしょうか。でも本当に、「寝る」とか「休む」という事に真摯に向き合うようになりました。

私が主催する支援の当事者研究会における、人気テーマの一つに「休み方研究」があります。休むとは何をやる事なのか。遊びに行くことは休むことなのか。じっと寝ているけど気持ちが焦っているのは休んでいるといえるのか…等、皆で語り合うと、ちょっと意外なほどに、人によって「休み」のあり方、捉え方、イメージが違うことがわかります。そして、休み下手の人が結構いるという事にも気付く今日この頃。人間って複雑！！

**福祉系対人援助職養成の
現場から
P57~**

竹中 尚文

門徒さんで精神疾患をかかえて、独り暮らしの人がいる。8月頃から連絡がつかないので、心配していた。9月によく会うことができ、様子をたずねた。これまで使っていた携帯電話が古くなって、電波が適しなくなったという。障害を抱えて独り暮らしなので、携帯電話を新しくするように勧めた。新しい携帯電話を持つのは難しいという。いろんな方々に尋ね回って、安価な携帯電話を教えてもらった。携帯電話の契約をしようとしたら、彼はブラックリストに載っているという。彼が携帯電話料金を無視するような人ではない。彼のお母さんが亡くなった時、彼に生命保険を残した。お母さんの友だちと称するおばさんに、そのお金を貸したそうだ。さらに彼の名義で携帯電話を契約して、料金を払わないまま放置したそうである。また、方々に尋ね回って彼に契約してくれる携帯電話会社を見つけた。

◆10月になって、精神病院のヘルパー

さんから電話がかかってきた。彼の手足がしびれるというので、大きな総合病院に受診したという。頸椎に問題があるらしく、外科の治療が必要になりそうだが、彼が受診を渋るようになった。彼を説得する助けをしてほしいという。とにかく受診に付き添うからといって、私は彼と病院に行くようになった。主治医は頸椎の手術しかないという。そうこうしている内に、彼の手足の動きも悪くなってきた。11月になってからの病院受診は、車椅子の使用が必要になった。彼は「首の手術なんて、怖い。嫌だ」という。このままでは手足を動かすことも不自由で、生涯を寝たきりになっても、手術をしたくないという。入院も手術も傍に付いているからと説得を重ねて、11月中旬に入院して、下旬に手術ということになった。彼は、新たに手に入れた携帯電話で病院に入院・手術の断りをいれた。ガツクリ。

◆再度、彼を説得して、ヘルパーさんが総合病院に掛け合ってくれた。外科医はキャンセルになっていた予定を復活させてくれた。入院してから「怖い、嫌だ」というのを説得しに通った。外科医も説明を重ねてくれて、さらに「この病院は手術をしてあなたを途中で追い出したりしないから、安心して欲しい」といつてくれた。彼は、かつて交通事故に遭って、顎を骨折して緊急手術を受けたことがある。手術の後、私は投薬の依頼をした。その病院は、薬名を見て彼の入院を拒否した。そんな経験もあって、彼は手術を怖がる。数日前、彼の頸椎手術は成功した。昨日、彼に「みんなを信用して、よかったね」と話した。勇気を振り絞って信じてよかった。

**路上生活者の個人史
P72~**

坂口 伊都

前回、マガジンで猫の病氣と動物病院について書きましたが、9月初旬に白血病を発症して逝ってしまいました。7歳でした。早すぎるお別れです。小康状態を保てたので覚悟はできていたつもりでしたが、いざいなくなると家のあちらこちらに猫の面影が浮かんで涙が出てきます。

私は傷んでいたのですが、夫が「待っている子がいるのだらう。連絡を入れてみて」と言い出しました。もうですか？と驚きまし

だが、気持ちを落ち着かせてから猫から目線の小池さんに連絡をしました。すると、すぐに茶トラの子猫と1歳を超えた姉妹猫を写真付きで紹介してくれました。夫が言い出しっぺなので、どの子がいいか尋ねると「姉妹猫かな」と即答でした。「大きくなっている子の方が、貰い手を見つけるのが大変だろうから家に来てもらおう」と言うのです。夫は、本当に待っている子に思いを馳せていました。

我が家に来てくれた姉妹猫は、興味津々でゴミ箱に突入したり、モノを落として壊したり元気一杯です。姉妹猫を通して、亡くなった子も思い出しています。少しでも、長生きしてねと願っています。



療育手帳の向こう側
P96~

河岸 由里子

【巷の小話その2】

① 筆者の住む千歳は、人口10万弱の市である。現在そこに、ラピダスという、半導体の大きな工場を建設中である。千歳空港の隣にあるので離着陸時に飛行機の窓からも見える。広大な原野に大きなドームのようなものが立てられているのだ。その煽りで、千歳市、隣の苫小牧市、恵庭市、そして北広島市も含め、地価が一気に上がっている。この半導体工場は、2ナノプロセスの製品を作ることを目的としているそうだ。2ナノといっても実際にその大きさの半導体を作るという意味ではないそうで、これだけの面積に対して、これだけの処理能力を持つという感じで、それが2ナノレベルということらしい。専門家ではないので詳しいことはわからないが、とにかくそれだけの性能の物を一個作るにも機材が500億円とかするようで、それが一台では量産することはできない。500億とかする機材を何台も必要とするわけで、それだけの資本

が集まるのかという疑問もある。政府がいくらテコ入れするとはいえてある。あちこちの地価が上がり、様々な企業が事務所を求めて、不動産の争奪戦を行っている。家屋もアパート等不足しているので、空き地には次々アパートが建っている。6000人規模という人口の流入が本当に実現し、工場が順調に稼働すればよいが、上手くいかなかったらゴールドラッシュ後のゴースタウンのようなことになるのではという懸念は捨てきれない。上手くいってくれと祈るばかり。

② ここ1年ほどで、千歳駅の表側、裏側が整備された。その際に、大きな木が何本も切り倒された。更に、駅前交番を拡張するために、桂など大木をまた数本切るという。それに反対している方々の一人とお話する機会があった。長年夏には心地よい日陰を提供し、自然の美しさを駅の殺風景さに加味してくれていた大木を切り倒すのは心が痛いとその方は嘆いていた。しかし、街中の木は放っておいてよいものではなく、手入れをしなければならぬ。その手入れをする人が居なくなったので、若木に変えたほうが良いという考えなのだそうだ。大木が処理する二酸化炭素と若木が処理するそれとは大きく違うだろうに…。①でアパートに変えるために雑木が切り倒されていることも含め、悲しい。

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P65~

先人の知恵から

P148~

大谷 多加志

短信に何を書こうかと悩むことも多いのですが、前号からの3か月間は、なぜだか色々新しい体験がありました。①人生で初めて英語で論文を書き無事掲載されました、②新聞の取材を受け記事が掲載されました、③勤務校での学会開催があり大会事務局スタッフとして関わりました、という感じです。どれも何度も経験がある人からすれば大きなことではないのかもしれ

ませんが、私にはひとつひとつ新鮮でした。というわけで今回の連載では③の大会スタッフ記を書いております。

発達検査と対人援助学
P86~

鶴谷 圭一

お話あそび会の動画解説第2弾をレポートしました。

弊園を結婚退職した保育者が、夫の赴任地で公立の幼稚園に就職し、園長に頼み込んで「発表会」のときに「お話あそび会」形式でやらせてもらい保護者からも大変喜ばれたというエピソードを聞いたことがあります。

最後の完成形は同じように見えても、それまでのプロセスで子どもたち自身が楽しんでいけば、本番でもその楽しさが滲み出てくるのではないかと思います。取り組んでくれる園が増えてくれればいいな、と願っています。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ haramachik

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から

P49~

中村 正

最近、1日が早く過ぎていくように思える。若い時と比べると時間の感覚が異なるのだろうか。できることは限られているのになにかもやろうとも思わないし、できることをただやっているだけなのに。それでもやはり何かをやろうという思いがあり、客観的にはいろいろ手を出しているからそうなのだろう。やはり新しいことをしてしまうのは、退職後に始めた一般社団法人UNLEARNの運営についてである。実務的なこと全般は知り合いのバックオフィスに委託をしているのだがそれでも実務はゼロではない。脱暴力事業もいくつかの要請がある。展開しようと思えば際限ないほど社会に暴力が溢れているということだろう。

こんなことも友人から聞いた。彼は大手企業の管理職。その部下が南米のある国に出張中、銃をもった二人組に襲われ金品を奪われたという。何とか命は無事だったが帰国命令をだすかそのまま現地で留ま

らせるか逡巡したという。さらにその管理職はトップに相談した。人事のトップは即刻帰国させろという。仕事をさせるなど。兵士と同じように心が傷ついているはずだし、そんな事態になっても仕事を続けろという会社だと思われると社員全体の心理的な安心が確保できないからだと言われたと。ハイな状態で何とか仕事はできると思うことでその傷を癒そうとしているのでそれはのちに傷を悪化させることになる。銃を向けられた者、その中をなんとか生き延びた者、想像を超えるがそうした事態は世界のあちこちにあるのだろう。そして敵というよりも味方のなかに暴力が潜んでいる日常があり、脱暴力の要請はそうしたところからだ。これもつらい。

臨床社会学の方法 P20~

団 士郎

『正しいことを言っているのだから、敗北にも怯むことはない。真実を語っているのだから、一時の結果などに振り回されることはない』、そんな世代感覚の周辺で、本音と建て前の人も眺めながら生きてきた。この多様さが世界だと思ってきた。

のではあるが近年、世の中がどんどん悪くなっているような気がしてならない。そこには我ら団塊世代の、『連帯を求めて、孤立を恐れず・・・』のあの感覚がネガティブに作用しているのではないかと思われて仕方がない。

多数派の談合によって正義が窮地に追いやられてきた結果だと今を嘆くこともできるだろう。しかし忘れてはいけないのは、現実にはそんな全員を含んで構成されている。

自分以外皆、愚か者！ そうつぶいていえないと言えるだろうか？ 自分だけは分かっている、我こそが正しいと自惚れる人は大昔からいた。「この頃の若いのは・・・」と上世代が語るのと似た様相だ。その結果が今ということだ。

私は自分が何かを分かっているなんて思い切れない。多分、意味のある選択の一つだろうと思うことはあって、それを続けてはいるが確信的な行為ではない。

世の中には長らく、賢明だと思っている人々の意見も流布してきたはずなのに、今がこんな状況でしかないことに責任を感じな

いで、誰かを馬鹿にし続けていられるのは相当な傲慢ではないのか。

晩年 D・A・N 通信 P33~

中島 弘美

年が明けると 2025 年。大阪では関西万博が開催される、そして、阪神淡路大震災から 30 年の大きな節目となる。

当時、私は、自宅にいて被災した。さらにもろもろの出来事があり、1995 年 4 月までの約三か月、立ち止まってじっくりと考えた。そして、所属していたところを退職し、カウンセリングオフィス中島をスタートした。

CON は 2025 年秋に 30 歳になる。これまで、やりたいと思うことを自分のペースで続けることができた。ありがたいことだ！ 感謝です！ これからも、積み重ねていきたいと願う。

カウンセリングのお作法 P30~

篠原 ユキオ

赤ペン先生

夏の私の個展で素敵な出会いがあった。大昔、私が中学校の美術教員をしていた時期に同寮だった人のお孫さんだ。小学6年生の女の子は私の作品はネットで見つけて知っていたという事だったがその理解力に驚かされた。

大人でも意味が理解できない人も少なくないのだが展示していた作品の全てが理解出来ていて、周りの大人たちに丁寧に説明して見せた。

子どものファンとは殆ど縁の無かった私の作品がちゃんと理解されている事にちょっとした感動があった。その日は彼女の似顔絵を描いてプレゼントし、帰りには描いているマンガがあったら見せてねと伝えて別れた。

数日後、彼女から似顔絵のお礼とともに自作の4コマ漫画が数点入った封筒が届いた。絵やアイデアはまだ稚拙だったが、ここをこうすればわかりやすい。これはこう描くと良くなる。という風にアドバイスをいろいろ書きこんで返事を送った。数日後には早速アドバイスを参考に練習していますと嬉しい報告があった。大学で学生たちに教えていた時とは全く違う充足感が

あった。

『教える』現場から離れて早くも 6 年が経つ。1コマ漫画の描き手や読者は少なくなっているし大学もカートゥーンコースの学生募集を停止した。まさに1コママンガの危機である。こうなったら子どものための1コママンガ教室を開くしかないなどという気持ちが強くなっている。誰か協力してくれる人いないかなあと真剣に考えるこの頃である。



HITOKOMART P207~

鶴野 祐介

11 月 30 日(土)朝9時、嵯峨野の大河内山荘を訪ねました。その錦繡はまさに絶景かな。

うたかたりの対人援助学 P155~

松岡 園子

母は大阪での生活にも段々と慣れてきたようです。外では杖をつき、家でもゆっくりの歩行ですが、自分のことは自分でできます。神戸ではデイサービスを利用して入浴介助サービスを利用していましたが、こちらではお風呂に段差がないためか、介護サービスを利用しなくても自分でお風呂に入ることができ、日常生活を送ることができています。

毎朝の洗濯のあと、ラジオ英会話の放送を聴き、朝ごはんを食べ、筋トレをして、掃除をして……と見ていると、毎日同じことを同じ時間に、同じ順番で繰り返しているように見えます。「変化の少ない毎日で退屈しないのかなあ？」と気になるのですが、母は毎日同じリズムの生活を送ることで安心しているようです。英語の勉強も、足腰を鍛える目的で始めた筋トレも、毎日続けてすごい！ これからも、その生活が

守られるよう支えていくことができると
思います。

統合失調症を患う母と ともに生きる子ども

P196

脇野 千恵

現在の地に居を構えて 35 年になる。その頃は、周りは一面田園風景。夜は真っ暗で、星が比較的良好に見える。ある住宅メーカーのモデル住宅地区で、15 軒の小さな団地。転居当初は色々な人が住宅見学に来ていた。

昔からのいわゆる田舎集落地なので、私たちは「入りびと」と言われたりして、自治会での居心地はあまりよくなかったが、自然豊かな環境に、育ち盛り子ども達はとても気に入ってくれた。都会育ちの子は田んぼのことは知らない。田植えしたての田に入り、生き物を取ってくる団地の子どもたちは、よく農家の人に叱られた。

米がどうやってできるか、恥ずかしながら私自身も、この地に住み初めて知ることが多かった。今やこの辺りも専業農家はない。しかも家の裏を眺めると、荒れている田が多くなってきている。事情を知らない者が「もったいないな」と嘆くのは無責任な話だが。

今子どもたちはそれぞれ独立し、家々は静かになった。周りを観察すると、いわゆる「地の人」の家屋敷の空き家が目立つようになってきた。大きな立派な構えの家も、人の気配がないと何とも寂しいものだと思う。しかしここ 2、3 年、空き家の大きな家が、ある時忽然と消え、更地になっている光景を目にすることが増えた。広い敷地に若い世帯向けの住宅が数件建つ。そして荒れ地の田畑も次々に住宅地に変身している。ベッドタウン化しているのか、若い世帯の入居も増え、自治会の世帯数は 4 倍に増えた。

人口増はいいことだと思うが、人目当てに大きな商業施設がいくつもでき、何かしら騒がしい。人は勝手だ。私達も「入りびと」扱いされ苦勞したのに、新たにまた「入りびと」があると、またそれはそれで不協和音が起こる。高齢化が進むなかで、私の住む地域はまた違った様相で変化していることに、ここはそんな風になってゆくのだと思う毎日だ。

こころ日記「ぼちぼち」

P215～

岡崎 正明

人生 2 回目の休載である。主な理由は 2 つ(誓ってネタ切れではない)。

1 つは以前もここで少し書いた、父親の自伝作りが進んでおり、その準備で何かとバタバタしているのだ。本を作って出すというのは、こんなにもいろんなことがあるのだな～と、改めて自分の知らない世界に足を踏み入れてみての気づきや発見に、日々面白がらせてもらっている。

もう 1 つの理由が実は結構厄介で、最近この病に本当に困らされている。特效薬は無いらしく、あれこれ手を尽くしているが、なかなか改善は乏しく、日々の生活で他人のお世話になるほどだ。病の名前は「四十肩(または五十肩)」というやつである。



今、「なんだそんなこと…」と思った方。舐めてはいけません。これに悩まされている人は、実は結構いたりする。おそらく年間何十億の経済的損失を社会にもたらしている(と思う。私の感覚では)。「腕が上がらない」はもとより、「痛みでつらい」「利き腕が使えなくて生活で困る」など、症状は人によって様々。私は利き腕の右腕の可動域が極端に狭くなり、カモ入りになってビンの蓋も開けられないし、字を書いてもヘロヘロの頼りない文字。寝返りもせず、夜も熟睡できない。しまいには上着の脱ぎ着ができなくて、家族や職場の仲間に「あの～、ちょっと着せてもらえかなあ？」と頼むこともある、ADL の自立にも「？」がつく有様だ。

名前のせいで深刻さとか苦勞が伝わらないところが、四十肩のもうひとつの課題だろう。他にもそういう不遇を受けている病気は、イボ痔、水虫、いんきん、手足口病、りんご病など、結構ある気がする。あんまり怖そうな名前もいかがかとは思いますが、もう少し同情を買えるようなシリアスな名

前をお医者さんにはお願いしたいと思う。どちらの学会に頼んだらいいのだろうか？

役場の対人援助論

休載

來須 真紀

早いもので、もう 12 月。昨今の頃は、なぞの症状(多分、コロナの後遺症)に悩まされておりました。あれから 1 年。こんなに元気になれるとは！改めて、家族や職場のみなさんに感謝しております。先日、わが子の子ども会のキャンプについて行きました。正直、乗り気ではなかったのですが、行った先で県によっては絶滅危惧種の植物「シラヒゲソウ」に出会いました。単純なもので、それだけで帰った時には、「行ってよかった」と思っている私でした。来年もこんな小さな喜びで「やってよかった」ケースワークを積み重ねていきたいものです。

教室の窓から

P～228

山口 洋典

「あの日」から 1 年を迎えようとしています。また「あの日」から 30 年も、まもなくやってきます。1 つ目の「あの日」は令和 6 年能登半島地震、2 つ目の「あの日」は阪神・淡路大震災を指しています。少なくとも私にとって折に触れて思い起こす「あの日」は、直接被災をしていないことも重なり、今日という「この日」を丁寧に生きているかを見つめ直す大切な日となっています。

先日、詩人の谷川俊太郎さんが亡くなり、NHK ラジオ R1「高橋源一郎の飛ぶ教室」では晩年に親交を重ねていた伊藤比呂美さんをゲストに迎え、追悼特集が放送されていました。この番組によくゲスト出演されているブレイディみかこさんと、その谷川俊太郎さんとの共著による『その世とこの世』(岩波書店、2023 年)があります。その中には谷川さんによる『その世』と題した詩も収められているのですが、「あの日」でも「この日」でもない「その日」に思いを馳せ、改めて今日という日を丁寧に生き、充実した人生を送りたいと願う、2024 年の年の瀬です。

PBLの風と土

P163～

千葉 晃央

対人援助学会第 16 回年次大会が終わりました。参加者の方々、登壇者の方々、ワークショップエントリの方々、ポスター発表の方々、大学関係者の方々はじめ、お世話になったすべての皆様、本当にありがとうございます。いろいろなご縁から、演者側として発信をしてくださいました。知識、体験、経験の共有などいろんな相互作用をあちこちで感じました。その作用の連鎖を起こすこともこの学会の使命と感じています。

団士郎編集長による「木陰の物語 掛け軸漫画展」も行ってくださいました。団先生も当日椅子を作品のところに置いて鑑賞している方と話してくださいました。展示は前日から大会期間に行われ、団先生がいない時にもたくさんの方が作品に触れました。「私も先生に習いました」と何人かの方にも突然話しかけられました。「私たちもです」とこたえました。いろんなところでつながっていきました。

対人援助学の対象は「暮らし」です。行儀よく収まっているばかりが暮らしではありません。そういう意味で、私が登壇した理事会企画 I「多様な学びの創造 一動機づけを生み出す仕掛けを探る」(河村昌樹先生、山本昌平先生、大谷編集員と私)では、新しく作っていくこと、その時にはまずやり始める！なんなら勝手にやり始めるでもいい！ぐらいの姿勢が…という話にもありました。こういうところが私の大好きな部分です。話題にできてよかったです。

大会テーマを「やりがい、生きがいのある対人援助を次代につなぐ」としました。元千葉ゼミの現場バリバリ卒業生、同僚、元受講生、私が習った先生、現役院生…、たくさんの方と時間を共にし、これからの対人援助について考えました。やりがいにつながる、明日からできる工夫もあちこちの企画でとりあげられていました。ありがたかったです。

昨年は広島大会の事務局、今年は京都大会の共同大会長…2 年間の多くの時間を対人援助学会の大会にかかわることになりました。次の大会も価値ある大会になるよう、みんなで作り上げましょう。よろしく願いいたします。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P16~

見野 大介

学童保育でドラゴンボールと出会った小1の息子。今日はレッドリボン軍について語り合う。良い作品は、いつの時代も人を楽しませてくれる。

ハチドリの器

P4

柳 たかを

前号(58 号)で、拙作「やぶにらみ日記」シリーズはひとまず終了です。同作は平成時代に自分のウェブサイトに掲載したものです。注文がなくても毎日描き続けることを目標に、毎日 4 コマ漫画 1 本描いてアップロードしていました。誰も知らなくてもかまわないと、コツコツ子供時代の思い出を 4 コマにしていました。4 コマにするとき、話を単純化しないといけないので、記憶のドロドロしたややこしい感情は削ぎ落とされ、楽しい記憶だけが残りやすいです。涙をながすにしても、嬉し涙、嬉し泣きを描くほうが自分も癒され、また描こうという気持ちになります。描いているマンガに作者が励まされる気持ちがしました。今号からは、作者お気に入りの名作物語をマンガにしたものをウェブ用に編集し、掲載させていただこうと思います。過去にわたしが影響を受けたお話を中心に連載したいと思っています。タイトルが変わりませんが、第 59 号からの 4 回は「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)。

蜘蛛の糸(1)

P128~

荒木 晃子

数年前には、カウンセリング、研究活動、執筆の 3 拠点に同時進行で取り組んでいた自分が懐かしい。いずれの業務・活動も楽しく、自分がやりたいことができていたからだ。日々時間に追われていても、体力(体重?)にも自信があり、他者からの評価は別として自分自身では問題なく充実した日常を送っていたように思う。

しかしここ数年で、自分を再確認し、改めて日常を振り返り、生活リズムに変化を加えた。「一度に二つ以上のことに手を付けない。プライベートな時間を優先して確保すること」。これが今の生活リズムであり、心身の健康を維持するために守っていることである。



もともと調理が好きなので、やむを得ない場合を除き外食はほとんどしなくなった。自宅で自分が食べたいものを調理し、場合によっては近所へおすそ分けする。今まで時間がなくて作ることができなかった料理にチャレンジする。転居して 4 年目にして、やっと近隣に関心を持ち、組合の役員を引き受けた。徒歩 5 分にある障がい者のグループホームで調理ボランティアを始めた。などなど、忙しいことに変わりはないが、心身に負担なく、本当にやりたいことだけを厳選した日常を送っている。

他方、勤務する生殖医療施設も 18 年目を迎え、新たな当事者を迎えるための冊子作製にも着手しており、その内容は来年度、何回か学会報告する計画もある。所属する大学では客員研究員の継続も 18 年目の更新手続きを終えた。毎年開催される、奈良県広陵町での家族理解 WS も今から楽しみである。

こうやって書き出してみても改めて思う。自分のやりたいこと・好きなことだけを選んだ日常を送っていることを、「しあわせに暮らしている」というんだろうな。

生殖医療と家族援助

P252~

小池 英梨子

学校にいるのは SSW(スクールソーシャルワーカー)、社会福祉協議会にいるのは CSW(コミュニティソーシャルワーカー)、病院にいるのは MSW(メディカルソーシャルワーカー)。

様々な分野で、困難を抱える人の支援をしたり、社会資源とつなげていくお仕事。そのラインナップの中に NSW「ネコソーシャルワーカー」をくわえたいと思う。(真剣)人もねこも一緒に支援プロジェクトの NSW 絶賛活躍中！



「多頭飼育増殖」の背景には、飼い主さんの社会的孤立や経済的、心身面等の課題があり、多頭飼育増殖が求められます。社会福祉士として仕事をしながら、「人もねこも一緒に」のつながりから NSW「ネコソーシャルワーカー」として活動する人が講師になり、社会福祉と動物愛護両方の側面から、「多頭飼育対策ガイドライン」を読み解いていきます。崩壊するその前に、何ができるのか一緒に考えてみましょう！

対象

◆動物愛護ボランティア、団体・対人援助職者・行政職員 など

内容

◆14:00～ 『理論編』 分厚くて難しそうなガイドライン、噛み砕いてみました。
講師：岡嶋 時子 氏 (社会福祉士 / 精神保健福祉士)

◆15:10～ 『実践編』 現場その「前」でできる連携を考えてみましょう。
講師：中村 夏香 氏 (社会福祉士 / 介護福祉士 / 保育士)

◆16:10～ 質疑応答

ご予約・お問い合わせはこちら

☎ 電話での予約 [10:00～21:00]
050-3390-8460

WEBでの予約 [24H]
QRコードからお申し込みください



主催 NPO法人 LIFE FOR CATS IN NARA
共催 人もねこも一緒に支援プロジェクト



そうだ、猫に聞いてみよう
P142～

寺田 弘志

隣の県の選挙なのに、11月の兵庫県知事選挙は、私の接骨院でも随分と話題になりました。

既存のマスコミは、元知事に不利な情報(中には完全なデマ)を流して、対立候補の優勢を伝え続けました。

一方 SNS 上では、テレビや新聞の偏向報道が次々とあばかれていきました。

最終的に斎藤知事が再選を果たし、オールメディアの敗北と言われました。

私もはじめは斎藤知事を、パワハラ知事、おねだり知事などと思っていました。

しかし SNS を通して、また、クチコミでもいろんな情報が入ってきました。

実は巨大な利権があって、斎藤知事がストップをかけて、教育に予算を回した。

すると利権に群がっていた人たちの斎藤降ろしが始まって、中傷ビラがまかれた。

出所が判明し、ビラを作った局長のパソコンが押収され、局長は3か月の停職になった。

局長は自殺し、パワハラとされた。しかし、

3カ月の停職が、自殺するほどのパワハラだったのか？

局長は人事権を笠に着て10年で7人の女性職員と関係を持っていた。

その記録や画像が公用パソコンに保存されていた。

自殺の原因は、それが明るみに出されるのに耐えられなかったからではないのか？

県議会やマスコミは、必死にそれを隠そうとし、パワハラをせいにした。云々かんぬん。

選挙戦を見て、世の中の変化を感じた人も多いのではないのでしょうか。

いままでマスコミが報道しなかった情報に、だれもがアクセスしやすくなりました。

SNS を規制すべきだという意見もありますが、だれもが自分で考えるチャンスが増えるのは良いことだと思います。

ただ、SNS 情報も信じ切ってはいけないなど、ときどき思い出すようにしています。

以前、接骨院では政治と宗教の話はタブーと言われていました。

もちろん勧誘や決めつけは NG ですが、そういう話題が出て大丈夫な時代になってきているようです。

接骨院に心理学を入れてみた
P169～

古川 秀明

小学2年生の授業観察をしていると、子ども達が「誰のおじいちゃん？」「どこのおじいちゃん？」と聞いてきます。もうおじいちゃんにしか見えないんだなあ、と何年前にはショックでしたが、今ではすっかり慣れてしまいました。

そのうちある女の子が私を見ながら「いけい」と言いました。そしたらみんなも釣られて一緒に「いけい、いけい」と大合唱になりました。そんなに私はイケずなじいに見えるのか？あるいはイボ痔と持っているじいさんに見えるのか・・・。

その女の子にいけいの意味を聞くと、なんと「イケメンのおじいさん」ということでした。生まれてから今までイケメンなどと言われたことがなかったので、嬉しいというよりも、こんな年になってから言われてもなあ・・・という思いの方が勝ちました(笑) ささいな言葉に気持ちが上がったりがつ

たり、いくつになっても成長しない自分がいます。

講演&ライヴな日々
P89～

原田 希

今年はこの年、と決めて牧場に缶詰め。春から始まった哺乳修行も100頭になりました。小さくても元気な双子、やむをえずの死産、帝王切開で巨大な子牛の誕生もありました。毎日の悲喜こもごもが100通りの経験値になったので、新たに生まれる子たちに返していけるなあと思っています。畜産業界にもアニマルウェルフェアの考え方が急速に浸透しています。家畜が、誕生から死を迎えるまでの間、ストレスの少ない健康的な生活ができる飼育法を続けていきます。やむなくお別れした子牛にも「またウチに生まれておいでよ」と声かけしてるのですが、次も我が家を選んでもらえる気がしています。

原田牧場Note
休載

野中 浩一

突飛な話である。

今の仕事を発展させて、うどん屋を始めようかと思っている。安全が感じられて、食べることに困らず、話し相手がいる。誰が店員で、誰がお客だか分からないくらいに、お客も働く。そんなうどん屋である。

これまで18年間経営をしていた感覚からすると、採算が取れる気はしない。しかし思いついたからには、やってみようかと思っている。

突飛な話である。

「島根の中山間地から Work as Life」
休載